

2023年9月21日(木)

はあとぴあ施設見学 アーティスト・岩田とも子

タイムスケジュール

10:10～11:40 「歩」工房(代々木公園まで歩く作業)

13:00～14:00 「紙」工房(紙漉き作業)

◎コーディネーターメモ

・「歩」工房

一心不乱に代々木公園を目指し、公園内を自由に動くものだった。散歩というより早く歩く作業だった。毎日、雨風に関係なく行われる。途中、地下道に入ったりする工夫もされている。また職員によれば、先頭の人を利用者の特性に合わせて選んでいたりとのこと。とにかく毎日されているものだから、歩くペースがとても早かった。岩田も追いつくのがやっと、と言っていた。だが彼女の収集癖が高まり、公園に着いて走りながら植物の収集を行っていた。利用者も公園に着くとパァ〜と自由に散らばった様子が、一心不乱に歩いていた時とのギャップで心が奪われるものだった。

・「紙」工房

紙漉き作業は二組に分担されていた。職員が岩田に紙の原材料から説明をしてくれる。今回は桑の木を使用しているとのことで、岩田が現物を手にする。岩田は利用者にも声をかけたり、部屋の中の色んなものを見たり、職員に質問をしたりとあつという間の1時間だった。ここでも利用者の特性に合わせて色んな動きを職員がしていた。暴れる自閉症の方がいるようで、その方の好きな音楽をかけていたり(好きすぎてテンションが上がってしまうため、全く知らない音楽も途中で挟むという工夫がされている。)、掲示物を貼らないようにしたり、自閉症の方が帰ってくるまでに紙漉き作業を終わらせるなど、細かな対応をされていることを聞いた。

◎見学後の感想(岩田とも子)

おはようございます。岩田です。

先日ののはあとぴあ訪問でのことを書き出してみました。唐突ですが最近、「太陽の光が地上に届くまでの時間」について興味が再燃していたこともあり、「速度」「限られた時間内でのこと」が頭にあったので「歩」工房のあの颯爽と歩く感じがより興味深く感じられました。以下少々乱文(一部は施設見学の作文みたいになってしまいました。)ですが共有させてください。

●ペースメーカー

公園の木々の隙間に見える噴水を目指して落ち葉の積もる地面を小走りする中、前から風が吹いてきて、右を見ればサルスベリの花が、左を見ればケヤキの葉が一斉に散っていった。その場に留まることはないためその美しい光景を目で録画するような気持ちで私も小走りで過ぎ去った。

なぜ留まることがなかったのか、それはその瞬間の15分ほど前に始まった「歩」工房によってつくられてきた歩きのスピード感が私の歩みに影響していたからだ。職員さん2名と利用者さん5名

の集団が散歩の出発地点であるはあとぴあを出るところから(というか彼らがエレベーターでおりに来たところからすでに)その後ろを追ってきたのだが、全体から発せられる高揚感(実際彼らがどんな気持ちなのかはわからない)のようなものがあつた。思いのほか速いペースで、こちらが立ち止まるとあつという間に見失いそうだった。なぜこんなに速く歩くのだろうと不思議に思いながらあつという間に公園に到着した気がする。

その後、そのスピード感について同行されている職員さんに尋ねると先頭を歩いていた黄色いしましまシャツの方がペースメーカーだということをおっしゃっていた。ペースメーカー(医療器具のことではなく)...ペースをつくる人。その一言は私の思考の中の様々な出来事に対する解釈に面白い転換を与えた。そうか、ペースを“作って”いたんだ。例えば多くの人とは違ったリズムや速度で何かをこなす人がいて、周りの人がその人に合わせねばならない状況があると。その時、周りの人の視点は「ペースをあわせる」ってことなんだけど、違う速度の人についていえばある意味「ペースを作っている」ということになる。そっか、、、と感心してしまった。現在私の日常には1歳の息子がいる。日々その息子の様子に合わせて行動してとにかく「ペースを合わせる」という感覚で過ごしていた。しかし息子に視点をおけば彼はペースを作り出していることになる。そっか私は息子にペースを作ってもらっていたのか。ペースをつくる人、合わせる人によってその場の空気もまたつくられていくのかもしれない。ちなみに黄色いしましまの方がお休みだと歩工房はもっと早くなってしまいうらしい。

●噴水池の外周とベンチ

歩工房の人々が公園についてから向かった噴水のある池を何周かまわることになっているらしい。外周の道にはベンチがいくつか並んでいて今日は2組の人々が座っていた。すれ違う一瞬に会話が聞こえてきて一組目はインタビュー(?)の練習中だった。もう一組は小さな声でポツリポツリ会話しているようだったけど外国語だったのでよくわからないがちょっと一休みしているような感じだった。

何周もするうちにその会話の断片を拾っているような感覚。私を含め歩く人達はレコーダーのよう。

●舞い落ちる葉が目撃するもの

何かをじっくり見ている間もなく過ぎていく状況の中、拾ってみようと思ったのは落ちてきたばかりの葉や花びら。面白い形、珍しい色、という基準ではなく散る瞬間に立ち会った葉。その葉は枝先から地面に落ちるまでの短い間、何を見たんだろう。葉にとっては一度きりの機会。

あとはただ落ちていたマツボックリをひとつだけひろった。数時間前、何日か前に落ちたのかな。公園内のちょっと過去の時間を思いながら持ち帰った。

帰り道、工房メンバーが去ったすぐあとに落ちてきたサルスベリの花びらをひろう。手でつまんだまま持ち帰る。帰りもまた颯爽と歩く。サルスベリの花びらにとっては思いがけない時間だったかもしれない。



●紙工房

午前中にきいた「ペースメーカー」という言葉の影響がここにも出て、一人ひとりがペースメーカーのように思えてくる。職員さんと利用者さんでその都度ペースを作り合っているような感じがした。職員の小杉さんに紙の原料となる桑のお話を聞きながら桑の木の皮をもらった。シュルシュルとつい触りながら話を伺う。いつものペースに私達が見学にくるときと小杉さんのペースは少し乱れてちょっとだけ忙しくなったかもしれないと思うと同時に私たちもペースメーカーになってるんだなとこっそり思った。

作業工程にある数字「2」と「10」について。紙を型から剥がす時に型の周囲を2周ほどつつく。このカウントにビー玉2つと小皿2つが使われていて1周するとビー玉を小皿から小皿に移動させてカウントする。紙をローラーで移す？作業は10秒？10回が目安でそのカウントは座った状態の腕振りでもカウントしていた。デスクワーク中は自分もやってみようかなと思った。

●息子の同行

息子を今回同行させてもらった。はあとぴあに到着し外のエントランスで待つ間、利用者さんがバスで到着した。バスの後方は車椅子が昇降できるようになっていて次々と後ろ側から出てくる様子を息子はじっとみていた。現在息子の興味の多くは車(というかベビーカーを含む車輪がついて転がるもの)にあるため、バス自体、それから車椅子にも興味がわいたようだった。日頃、息子目線でみると車＝「くるくるまわるタイヤがついていて、移動するもので何かを載せたりするもの。」という感じで大きさや詳しい用途を超えて興味がわくようだった。車の概念が形成されている途中なのかもしれない。この日、はあとぴあ館内でもたくさんの車をみかけた。

息子の反応で一番不思議だったのはロビーで突然歩きたいと主張し、ひょこひょこと歩き始めたことだ。初めて歩いてからちょうど一ヶ月。多くても10歩前後室内で歩く程度だったのが一体どうしたことだろう。事務局の関さんに手をとってもらいロビーをうろつきはじめた。靴を嫌がったため裸足で歩いたのだけど床の黄色い誘導ブロックもよろけながら踏みしめていた。はじめて会うプ

プロジェクトメンバーの人々、はじめての場所。むしろそんなときは様子を伺ってじっとしてそんなものだけど、不思議だった。奇しくもその日は「歩」工房に同行する日。そうだそうだ、私はここ一ヶ月歩くことについてずっと見守り考えていたのだったと思い返す。

半日ほど共に滞在しながら、息子を同行させてもらったことの嬉しさと息子に対する羨ましさを感じた。まだいろんな概念がふわふわとしている中でいろんな人が作り出す空気の中にいるなんて。

※はあとぴあのバスを見ながら「珍しいバスだね、うちの車図鑑には載っていないかもね」と話かけていたので自宅に戻ってから図鑑を確認してみたところ、バスではないものの車椅子の昇降ができる車がちゃんと載っていた。